

国産松煙は継承できるか？ 錦光園 長野睦さんが決心したこと

関連記事

vol.58 連載「身の丈しごとびとに会いました」(ウェブ公開予定あり)
家業を継いでわかった 失うわけにはいかないもの 長野睦さん

取材・文 阿南セイコ (さとびこ編集室)



②虫にやられ枯死した赤松が
倒れて他の木にひっかかっている



①ジンを取り出して見せてくれる渡邊さん

赤松のありかを訪ねる

前回の記事でお伝えしたクラウドファンディング(※1)は、560万円を超える支援が集まり、プロジェクトに大きな勢いをつけた形で成功した。しかし、ここに来て爆工場の設置のほうがスイスイとは進まず、まだ報告できる段階にない。その一方で、渡邊祐示さん(東吉野村、渡邊山業)から「心あたりがあります」と反応のあった赤松の件が気にかかる。今回は、錦光園の長野さんとともに東吉野村を訪ね、渡邊さんに赤松の採れる森を案内していただくことにした。

待ち合わせの村役場前、渡邊さんは愛車のジムニーで迎えてくれた。早速、森へ向かう。集落のあるゾーンをぬけて、山道を登り始めたところ、予想はしていたものの林道の狭さと傾斜の厳しさに、たちまち身を縮ませることとなった。車幅ぎりぎりの路肩から下の景色が、途方もなく下に感じる。もちろんガードレールも何もない。「ジムニーでギリギリです」(①)。落ちたら終わり。「これが渡邊さんが今林業をしている現場へ続く道なのだ」と思うと、毎日の無事を祈らずにはいられなくなった。時には切り返さないとカーブできない箇所を超えて登り、「このへんですね」と尾根らしきところで車が止まった。視線の先で、倒れかかった木が道の上の空を分断していた(②)。林業はいつも危険と隣り合わせ。そんな倒木は他にもあり、運悪くこれが落ちて

※1 = 1400年続く「松煙墨」が途絶える危機。国産松煙の製造を継承する！
<https://readyfor.jp/projects/149649>



⑤ 渡邊さんの自宅にて。集まったジンを手にする長野さん



③ しっとりとう水分を含んだジン。いい香り。



⑥ 渡邊祐示さん(左)と
長野睦さん(右)



④ 現地にて。ここまで来るには
渡邊さんのジムニーが
やっと通れる道ばかり



赤松と東吉野村

「東吉野村では、お盆に赤松の脂を焚いて迎え火にする風習があって、村の人は赤松がどこにあるのか意識しているみたいですよ」と渡邊さん。地元の先輩に相談しながら、赤松を見つけやすい場所を探している。

⑦ 宿泊もできる「ふるさと村」(大字大豆生)内の「食堂いちえ」。ゆっくりしたかったら、ここがおすすめ!

きたら、致命的だ。「東吉野は96%が森林で、そのうち89%が人工林。その中で、尾根に近い痩せた土地に赤松があります」。苔むした倒木の中から赤松を見つけると、渡邊さんはチェーンソーで枝を試し切りして見せてくれた(①②)。枝の芯の部分、赤くなっているのがジンだった。赤松が集中している場所があるわけでもなく、すべての枝からジンが採れるとも限らない。本業である伐採作業の合間に、赤松のジンはないか、探して集めてもらうしかないのだ。

山をおりて、自宅に案内してもらうと、これまでに集めたジンが箱に収められて並んでいた。長野さんが、大事そうに手に取り、スマホで写真をとっていた(⑤)。

東京から移住したフォレストー

渡邊さんは、東京で映画制作に関する仕事についていた。それがなぜ今、東吉野でフォレストーなのか。

小学校跡を活用した食堂(⑧)へ場所を移し、薪ストーブから暖かい空気が伝わってくる席で話を聞いた。きっかけはコロナ。フリーで助監督を経験し、CG制作会社に就職、感染が始まった時は中国にいて「キングダム」にも携わっていた。帰国すると東京がロックダウンし、突然仕事が止まってしまった。「それがよかったんですよ」と振り返る。「もともと登山が好きで。せっかくだから屋久島へ行っただんですね。島で林業をしている人の話を聞く機会があり、衝撃を受けたんです。

何にも知らないから、年輪ひとつをとっても、僕らの仕事と比べて、何という時間軸の違いだろうか。林業って何だ? 知りたい」。その頃、吉野町での林業体験の情報を知り、休みを都合して参加した。そこで「奈良県フォレストアカデミー」(※2)のパンフレットを手にする。

宿に泊まり解散の朝、金峯神社を案内された。帰りは送迎の車を辞して歩いてみると、車が脱輪している人を見つけ、助けたところ「お礼にわたしが勤める蕎麦屋で食べてください」と言われたという。「蕎麦屋の店主さんが『話は聞いています』と受け入れてくれて。旧吉野高校の出身であることや、林業のこと、そして、もうすぐ母校が林業の学校になるんだと、誇らしく語ってくれたんですね」。新幹線に乗りあらためてパンフレットを読み、東京に着いた時、「会社をやめよう、入学しよう」と決めている自分がいた。「何も考えてないでしょう?」と笑う(そんなはずはない。ただ、それはまたの機会に)。幸い奥さんも了承してくれ、住む家が見つかったのがこの村だった。退社を決めてからわずか4ヶ月後、渡邊さんは、アカデミーでの一期生となり、2023年春の卒業の頃には、村で自営を始めていたのだ。

東吉野村へは初めて来たという長野さんは、取材の帰り、林業の現場を見たことを感慨深そうに振り返っていた。森と街の間に、小さな脈が通じた瞬間を見る思いがした。

※2 = さとびでは、開校直前の藤平拓志校長の寄稿を掲載しています。

バックナンバーをお持ちの方は、今一度ぜひご覧ください。(ウェブ非公開)
さとびごころ vol.47 (2021autumn) 特集 いつまでも豊かな森 12p